

鳥シリーズ 1月号 小田久美子
続「酉・とり・鶏」

我家は夫が酉歳。今年の初詣は足を延ばして石上さんにお参りしました。テレビの影響もあるかと早目に家を出ましたが、想像をはるかに上回る人出は静かで大好きな古社ではありませんでした。いつもはのんびりお庭を闊歩している「鶏」さんたちは早々とどこかへ疎開させた(?)のか、お賽銭箱の向うの拝殿の端に写真で鎮座しておりました。

「とり」は『古事記・日本書紀』の中でも大事な役目の「とり」でもあります。(以下古事記より)速須佐之男命の乱暴狼藉を恐れた天照大御神が、天石屋戸の中にお隠れになり、世の中が真暗闇になりました。八百萬神が天安之河原に集まって相談し、「常世長鳴鳥」を集めて互いに鳴かせ、伊弉許理度賣命が鏡を、玉祖命が八尺勾玉を作り、天宇受賣命が裸で踊り、皆で楽しく大騒ぎして、天照大御神が何事かと顔を覗かせるところをこちらにも神がいますからと鏡を見せます。「おや?」と乗り出す天照大御神の手を天手力男神が引き出すとたちまち高天原・葦原中国は明るくなりました。

須佐之男命は髭を切られ、手足の爪も抜かれて高天原から追放され、「八岐大蛇退治」へとお話しは続きます。その大蛇の腹から出た「草薙剣」は、12代景行天皇の御世、焼津で倭建御子の命を助け、「鏡」「勾玉」と共に天皇家の印「三種の神器」となります。現代の私たちに「日蝕現象」を連想させるこの光景ですが、まだ暗い夜明け前に鶏が鳴き、それに応えるかのように太陽が上がる不思議。

その太陽が見えなくなることは古代の人々にとって一大事件だった事でしょう。この神話から京都の祇園祭の「鶏鉾」が作られています。

去年は若冲生誕百年で、猫も杓子もの「若冲ブーム」の年でした。若冲フェチ16年の私は「とり」と言えばこの「鶏」です。



歴史文化クラブ 1月オプション行事
「大神神社初詣と三輪山登拝」

1月10日(火)、今回は昨年に続く二度目の三輪山登拝である。今年から月例研修会と歴文の共催の初詣として毎年1月の恒例行事となった。

25名が参加、天気は晴れ、気温も暖かい。参道は掃き清められ、境内は朝が早いせいか参拝者も少なく、厳かな雰囲気漂っている。

大神神社には本殿はなく、拝殿の後にある三つ鳥居を通してご神体の三輪山を拝む原初の神祀りの様式である。山頂には「奥津磐座」があり大物主神の神霊が宿る依代である。ヤマト王家はこの神を畏れ敬い、歴代大王自らが丁重に祀ってきた。

「拝殿」に昇殿し、まず手を洗い清めて全員が居ずまいを正す。神職の祝詞が厳かに奏上され、当社の鎮魂詞「幸魂・奇魂守給幸給」が唱えられ、古川さんが奈良・人と自然の会を代表して玉串拝礼を行う。会の繁栄、会員の安全、そして活動日の好天をお祈りした。

次に二人の巫女さんによる鈴祓いがあり、鈴の妙なる音は静かに心の奥底まで染み入り、まこと心身が清らかになる。お神酒を頂いた後、拝殿の横に移動し、三つ鳥居を通し三輪山を参拝した。

大神神社のご祭神「大物主神」と「大己貴神」はいずれも大国主神と同一神。「少彦名神」は大国主と共に国作りに携わった小さな神で、ガガイモの鞘に乗ってやって来たという。

大物主神の「荒魂」を祀る狭井神社から三輪山に登山する。三輪山は形が美しいことに加え、大和平野からみて太陽が昇る方向にあることから、神が降臨する神奈備山として、古くから(弥生時代頃か)土着の信仰対象とされてきた。

山中は杉や檜の大木が鬱蒼と茂り、森厳な雰囲気がある。登り1時間半、下り1時間の行程であった。

「福神堂」で三輪そうめんを肴に「三諸の酒」を頂く。崇神天皇の時代、「高橋活日」が神酒を造って天皇に奉り、「倭成す 大物主神の醸みし神酒」と歌い、大物主が酒造りの神であると称えている。(中井 弘)